

【書評】

藤城孝輔著『村上シネマ 村上春樹と映画アダプテーション』

山根 由美恵

(山口大学 准教授)

本書は藤城孝輔氏の初めての学術書である。藤城氏は映画学の気鋭の研究者であり、イギリスで学位取得をしていることから英語能力が高く、欧米圏のテキストに対する分析にも定評がある。著者の科研の研究分担者として、また本研究会（村上春樹とアダプテーション研究会）でともに研鑽を重ねている同学でもある。

本書の特徴は、劇場公開された村上アダプテーション映画のほぼ全てを網羅した初めての学術書である点、映画の手法はもとより、文学分析としても卓抜な視点を有す点であり、他の村上映画評とは一線を画す重厚な著作である。特に、先行研究や同時代コンテキスト等の緻密な調査は村上研究の中でもレベルが高く、調査能力・立論能力とも非凡である。

本書は四部仕立てになっているが、第I部第1章「村上春樹と映画、その有機的なつながり」は序章としての位置づけがなされている。章の副題として「映画批評に見る創作の源泉」とあるように、村上のキャリア初期における日本映画批評を体系的に追っている。ここで取り上げた鈴木清順「木乃伊の恋」「夢二」「ツイゴイネルワイゼン」・村上の映画評・「騎士団長殺し」(2017)の連関はオリジナリティが高く、村上文学と日本映画の親和性の高さに触れた先見性がある論考である。ただ、関東大震災と東日本大震災と連関させる発想は新鮮であるが、この考察は少し飛躍（推論を重ねる）があるように感じられた。

第II部以降、村上文学の映画化の歴史を次の三つの時期に大別している。1980年代の自主映画（第II部）、2000年代のアート・シネマ（第III部）、2010年代以降のコンテキスト（第IV部）であり、アダプテーション化の流れを通史的に捉えている。

第II部「インディーズ映画の時代」では、1980年代のポスト撮影所時代の映画化作品（「風の歌を聴け」、「パン屋（再）襲撃／100%の女の子」、「森の向う側」）を取り上げている。このうち、「風の歌を聴け」「森の向う側」は著者も論考¹を書いているが、藤城氏の調査・考察の鋭さには瞠目した。第2章「風の歌を聴け」では「ノスタルジア映画」（フレドリック・ジェイムソン）としての特徴を捉え、戦後日本の社会システムにおける歴史的な断絶に対する応答かつ歴史的コンテキストを失った過去のメディア史に対するパステイッシュを読み取り、評価が低かった映画「風の歌を聴け」の価値付けを行っている。第3章「パン屋（再）襲撃／100%の女の子」では、村上文学を愛好する個人の自主制作によって世界各地で同時発生した映像作品リスト作成している（付録2：54作、付録3：22作）。こういったリスト作成は相当な労力と時間をかけなければ作れず、研究に対

¹ 山根由美恵「映画「風の歌を聴け」論一「鼠」／小指の女／新宿・渋谷一」（『近代文学試論』2023）、山根由美恵「重なり合うドラマ／響き合う「森」」（『層』2023）

する真摯な姿勢の表れとともに、藤城氏の語学力が遺憾なく発揮された成果でもある。第4章「森の向う側」は現在ビデオ(VHS)でしか鑑賞することができないマイナー映画であり、著者と藤城氏のみが研究として取り上げているが、評価に値する映画であると考えられる。藤城氏は感覚表現(聴覚(ピアノ・靴音)・嗅覚(コロンの匂い・手の匂い)・触覚)に着目しているが、こうした分析は映画学専門である視点が見られ、著者は勉強する点が多々あった。また、第II部全体を通して、1980年代の日本映画界撮影所の状況(システムの崩壊、自主映画や学生映画からプロになれる機会等)との関連付けが行われており、文学研究者に不足している映画アダプテーション研究の基本(同時代コンテキストとの連関)を学ばせていただいた。

第III部「原作への忠実さととの格闘」では2000年代の作品(「トニー滝谷」「神の子どもたちはみな踊る」「ノルウェイの森」)を取り上げている。村上は、「森の向う側」以降1990年代は映画化を一貫して拒んでいたが、2000年代に一部の映画作家に再び許可を出すようになった。村上が監督の取捨選択を行い、アート・シネマの枠組みの中で言及されることの多いこの時代の作品群について、著者は原作に忠実であることへの固執が際立っていると判断し、本書では映画作家による原作との格闘に重点をおいて議論を展開している。

第5章「トニー滝谷」では、「水平方向」(ダドリー・アンドリュー:同時代コンテキストとの関係)に着目し、市川準監督が拘っていた「父」なき時代の父子関係のあり方(それは1980年代以降に台頭した世代の映画作家における撮影所時代という映画史上の過去に対する応答でもある)と「トニー滝谷」との融合の様を述べる。また、「語り」(ヴォイスオーバー)という映画というメディアに特徴的な手法を小説の「語り」の再現として捉える分析がなされており、これは文学の「語り」研究にも参考になる学際的な分析である。「トニー滝谷」分析では原作との類似的な関係の指摘が行われていたが、第6章「神の子どもたちはみな踊る」は相違点を挙げる方法を取り、多文化社会で生きるアイデンティティの問題と宗教に着目している。特に、原作の新興宗教が映画ではキリスト教に近い宗教となっている指摘は重要であり、アメリカにおけるキリスト教に関する情報や耳のかけた男を追う場面等のキリスト教的寓意性の加味の分析は説得力がある。映画「ノルウェイの森」は、ベトナム人監督(トラン・アン・ユン)による日本人俳優・日本語使用の日本映画という意欲的な取り組みであったが、映画自体はそれほど評価は高くない(私もあまり好きではない)。第7章は、グローバリゼーションの状況を的確に指摘した上でトラン作品の全体像を踏まえ、映画「ノルウェイの森」の特徴(それはどちらかと言えばマイナス評価であった表現)について昭和ノスタルジアの回避であり、村上が目指したグローバル志向(海外戦略)と軌を一にする試みであったと捉えた。また、京都太秦映画村図書館等国内の限られた場でしか閲覧できない脚本との比較が行われており、ここでも藤城氏の真摯な研究姿勢の一端を見ることができる。

第IV部「多様化するコンテキスト」では、大衆文化やグローバル化などコンテキストが多様化する2010年代以降の作品(「アコースティック」「ハナレイ・ベイ」「バーニング 劇場版」「ドライブ・マイ・カー」)を対象としている。第8章「アコースティック」は韓国のアイドル映画というマイナー作品であり、アート・シネマとは対照的で研究として取り上げられることが皆無の作品であったが、商業映画の意義について分析する意欲的な論となっている。韓国では村上文学が「無国籍」の文化商品として受け入れられているが、本作において日常生活をとりまくメディア環境に浸透し、文化的な他者となっていないという文化享受の面で価値ある指摘を行っている。第9章「ハ

ナレイ・ベイ」は原作からの逸脱が少なく、私も「冗長」と記したことがある²が、藤城氏は男性登場人物の拡大の意義について分析を試みている。サチの息子役：佐野玲於は男性アイドルグループ（GENERATIONS from EXILE TRIBE）のメンバーであるがそのマイルド・ヤンキーという特徴に着目し、村上文学と比較したところはオリジナリティが高い。また原作とは異なり、ロング・ショットのシーンやアイライン・マッチの視点からサチの認識の限界を読み取っている。第10章「バーニング 劇場版」も拙稿³で論じたことがあるため、藤城氏の独自性について触れておく。藤城氏は映画で描かれる「怒り」を韓国の若者世代に見られる不満や不寛容と地続きと捉え、それを「不可視性」（アンドレア・ムビ・ブリゲンティ）の観点から論じている。「不可視性」は女性（ヘミ）と北朝鮮に現れているが、ヘミの形象：男性の視線の優位性、北朝鮮：パジュの山の向こうと放送による「見えない敵」の脅威があると論じている。結論として、ヘミの失踪を通して、男性の視線の限界＝既存の認識の枠組みの限界を示していると述べている。「ドライブ・マイ・カー」はアカデミー賞受賞作ということもあり、各種特集や佐藤元状編『「ドライブ・マイ・カー」論』（慶應義塾大学出版会・2023）等で積極的に取り上げられている。第11章で藤城氏は「バーニング」との共通性（女性表象：男性主人公にとって不可知）に触れつつ、「ドライブ・マイ・カー」が他者の〈声〉を聞く行為に重点が置かれている点に着目し、論を展開している。また、広島という場がもたらす「罪」「加害者」「被害者」という重要な問題へ考察を深化させている点は卓抜である。

なお、第IV部では原作に対する忠実さの問題の検討にとどまらず、それぞれの時代、文化のコンテキストにおいて個々の映画化作品がもっていた意義を明らかにする姿勢を取っている。

最後に補章について触れておく。「小人たちと踊る」「音の日記」「特集ドラマ バーニング」「めくらやなぎと眠る女」は「補」章となっているが、あくまでそれは枚数の問題に過ぎず、全て緻密な調査が行われている。「小人たちと踊る」「音の日記」は著者も論考⁴を発表しているが、科研の研究分担者である藤城氏からの情報提供が元になっており、劇場公開がなされていないアーカイブ発掘にはいつも驚かされる。「特集ドラマ バーニング」では、ドラマ版の大胆な削除部分に加えオリジナル韓国語・直訳・劇場版吹替・ドラマ版吹替の比較がなされ、劇場版こそが原作の「曖昧さ」を有すと述べている。「めくらやなぎと眠る女」（ピエール・フェルデス）は最新アニメーション映画であるが、複数の短篇を総合したその方法を、レイモンド・カーヴァー原作映画の「ショート・カット」との関係性について論じており、首肯できるものである。

グローバル規模の綿密な調査、確かな考察が全ての章において徹底されており、村上アダプテーション研究はもとより、村上文学研究者必読の書であることは言を俟たない。多くの方に読んでもらいたい力作である。

² 山根由美恵「『世界文学』としてのバーニング—村上春樹『納屋を焼く』を超えて—」（『広島大学大学院文学研究科論集』2019）

³ 注2および山根由美恵「フォークナー／村上春樹／イ・チャンドン—村上春樹「納屋を焼く」の戦略—」（『日本文学』2024・9）

⁴ 山根由美恵、「ウクライナ映画「音の日記」論（原作：村上春樹「めくらやなぎと、眠る女」）—「コミットメント」と「幻想」要素の効果—」（『早稲田大学国際研究ジャーナル』2024）、山根由美恵、「スウェーデン映画「小人と踊る」(Dansa med dvärgar)における Way of life ジェンダー変更というアダプテーションの可能性」（『村上春樹とアダプテーション研究』2025）